学べるゲラ

第13回

親子2代で甲子園出場の主将

※2023年8月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

ゲームセットの瞬間はベンチで迎えた。整列して、相手校の校歌を聴き終えると、他のチームメートと一緒に近くにうづくまって黒土を集めた。甲子園で初の8強入りと快進撃を続けた、おかやま山陽。遊撃手を務めた渡辺颯人主将（3年）にとっては、父に並び、少し追い越す夏になった。

甲子園への切符を手に入れた時「超えたい人がいる」と周囲に話した。1996年に倉敷工（岡山）で夏の甲子園に遊撃手として出場し2勝を挙げた父の康一さんことだ。

渡辺主将が野球に触れ始めたのは3歳の頃だった。康一さんが軟らかい白球を遊具として与えた。「野球小僧という言葉がぴったり。そんな子どもでした」。何度もボールを当てて自宅の壁を痛めるのでいさめることもあったが、康一さんにとってはどこか自分に似ているようで、うれしくもあった。

中学生の頃までは技術指導をすることもあったが、おかやま山陽に進学してからは口を出すことは控えた。自分で考える力をつけてほしいという老婆心だった。

高校での成長を感じた。だが、昨秋の中国大会では準決勝まで進出するもあと一歩届かず、チームはセンバツを逃した。

主将としてチームをまとめる苦悩を打ち明けられたこともあったが、具体的なアドバイスは控え続けた。最後の夏は、部員たちが「プレーと背中でまとめあげた」と評

価するリーダーシップで、チームを甲子園出場に導いた。

第１０５回高校野球選手権記念大会第12日の19日、おかやま山陽は準々決勝で神村学園（鹿児島）と対戦した。七回まで両校のスコアボードに０が並ぶ緊迫した投手戦となった。だが八回に打者９人の猛攻を受け、一挙５失点。九回にも追加点を奪われ０―６で敗れた。

一塁側アルプス席には康一さんの姿があった。「甲子園は夢の舞台。自分と一緒のポジションでプレーする姿を見せてくれるなんて、私は幸せものです」。息子は父の２勝を超えて３勝を挙げた。「数字では超えられちゃったけど最高の親孝行ですよ」とうなづいた。

渡辺家の玄関には、瓶に入った甲子園の土が置かれている。康一さんが27年前に甲子園から持ち帰ったものだ。渡辺選手は自宅から高校に通学した。雨の日も風の日も、家を出る時に瓶を見て、夢の舞台に思いをはせてきた。

今回の大会では、新型コロナウイルス感染症対策で、禁止されていた「甲子園の土」の持ち帰りが４年ぶりに可能となった。試合後、渡辺主将はこの夏に自身が持ち帰る「土」について「父のそれの隣に並べるつもりです」と話し、甲子園を後にした。